

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02378

研究課題名(和文) 指揮者C・クラウスとナチス・ドイツ時代のラジオ番組制作に関する実証的研究

研究課題名(英文) Study on a Radio Program by Clemens Krauss During the Nazi German Era

研究代表者

佐藤 英 (SATO, Suguru)

日本大学・法学部・准教授

研究者番号：10409592

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で主として検証したのは、ナチス・ドイツ時代に指揮者クレメンス・クラウスがベルリン、シュトゥットガルト、ウィーンにおいて行った活動である。ドイツ語圏のアーカイブに残されているドキュメントをもとに、当時のラジオ番組の制作過程について、多くの事例を示すことができた。また、当時の新聞等を参照し、収録された番組がいつ放送されたか、その番組がどのように受容されたかについても考察を行った。

以上の検証により、クラウスがナチス・ドイツ時代のラジオ放送における多彩な音楽プログラムの制作に積極的に関与していたこと、ナチスがその演奏を聴取者へのアピールとして積極的に利用していたことを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、現地のアーカイブ等で保存されている未刊行の一次資料を多数用いながら、これまで十分に研究が行われていなかったナチス・ドイツ時代のラジオ放送におけるクラシック音楽番組の実態と当時の音楽文化の実情の一端を、クレメンス・クラウスを中心に実証的に検証したことである。

本研究の成果は、音楽をプロパガンダのツールと位置付け、マスメディアを通じて積極的に活用していたナチスの戦略の一端を垣間見せるものでもある。この点に着目すれば、本研究で扱った内容は、現代におけるマスメディアをめぐる諸問題を考える際、歴史から得られる事例として、アクチュアルな社会的意義を持ち得るように思われる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the activities of Austrian orchestra conductor Clemens Krauss during the Nazi German era, particularly in Berlin, Stuttgart, and Vienna. Using archival documents in Germany and Austria, I presented many examples of the radio program production processes of the time. I also referred to the newspapers during this period and determined when the programs were broadcast and how they were accepted by the public. Based on the findings, Krauss was actively involved in the production of various radio programs, and the Nazis used his performances to appeal to listeners.

研究分野：近現代ドイツ文化研究

キーワード：ナチス クレメンス・クラウス マスメディア ラジオ 音楽政策 プロパガンダ ドイツ オーストリア

1. 研究開始当初の背景

ナチス・ドイツ時代のクラシック音楽文化に関する先行研究における問題点として、プロパガンダの手段としてラジオ放送がナチスに利用されたことの重要性は認識されているものの、音楽番組に関する実情調査が手薄であることが挙げられる。例えば、実際に放送された番組の記録、特にドイツ国内においてラジオ情報誌が休刊となる1941年6月以降のものについては、全体像を把握することが難しいため、先行研究でアプローチの対象となってきたものに偏りが生じている。また、演奏者との交渉や演奏レパートリーの選定、放送に至るまでのプロセスといった、放送の現場で何が起きていたかということに関しても、踏み込んだ調査が行われていない。

本研究に先立って実施していたリサーチにおいて、この時代に第一線で活躍した指揮者クレメンス・クラウスに関しては、未刊行のものも含めて、他の演奏家よりもかなり多くの資料が残されていることがわかっていった。また、放送局サイドの記録でも、ナチス・ドイツ時代の全般にわたるといっていいわけではないにしても、解明が難しいと思われていた当時のラジオ音楽番組の制作過程についてアプローチできる可能性も開かれてきていた。番組情報についても、ドイツ国内外の新聞等を調査することにより、ラジオ情報誌が休刊となっていた時期であっても、相当数の情報が得られる見通しもあった。

以上の点を踏まえた結果、本研究のアプローチ方法としては、クラウス関連の資料と放送関係の資料の双方を参照しながら当時の実情を把握することが妥当であると判断した。また、この指揮者の活動に注目しながら研究を進めることにより、ナチス・ドイツ時代のクラシック音楽文化がラジオ放送とのかかわりにおいてどのように展開されていたかについて、他の演奏家と共通しているところを把握できることも期待できた。

2. 研究の目的

ウィーン出身の指揮者クレメンス・クラウスは、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとともに、ヒトラーやゲッベルスの信頼を得て、多彩な音楽活動を行った演奏家の一人である。そうした活動の一つが、放送への出演だった。本研究は、クラウスがナチス・ドイツ時代の放送文化においていかなる役割を果たしたか、ドイツ語圏の公文書等の未刊行文書をベースに、その実態の解明を目指すものである。具体的には、彼の出演した番組制作の過程を深く追求することになるが、それは彼個人の問題にとどまらず、最終的には、ナチス・ドイツ時代に当局の芸術政策の下、音楽家が放送文化とどのように向かい合い、自身の活動を展開できたかという、当時の音楽文化のあり方を解明することにもつながるはずである。

3. 研究の方法

このリサーチでは、クラウスに関する資料を収集する際、ナチス・ドイツ時代の放送に関する一次資料を広範囲に調査した。その内容とは、ドイツとオーストリアのアーカイブでの現地調査、アーカイブから入手したデータを使用した日本国内での調査・分析、ラジオ番組表や新聞等の定期刊行物からの音楽番組のピックアップ、インターネットや国内外の図書館での新聞記事の収集である。研究にあたっては、一点一点丹念に資料を読み、得られた情報を分析するという地道な方法をとった。この手法を採用したことにより、クラウスに関する事例だけでなく、当時のクラシック音楽をめぐる様々な事情に迫り得る膨大な一次資料に直接アクセスすることが可能となった。

4. 研究成果

先に述べたように、今回の研究ではクラウスに関する資料を網羅的にリサーチする手法を採用したため、彼に関する情報に加え、当時の多くの演奏家の動向についても、これまで知られていなかった情報を多数得ることができた。このリサーチの結果をもとに、今回の研究期間中に7本の論文を刊行した。以下はその概要である。

(1) ベルリンにおけるクレメンス・クラウスの活動に関するもの

論文「1930年代ベルリンにおけるクレメンス・クラウスの音楽活動」

本論文においては、クレメンス・クラウスが1933年から1939年6月までの間にベルリンで行った音楽活動について検証が行われた。その要点は、以下の3点についてである。

第一点は、クラウスがベルリン国立歌劇場監督に就任するまでの経緯についてである。両者が初めて共演するのは、1933年のリヒャルト・シュトラウスの《アラベラ》のレコーディングだった。その後、両者は共演の機会がなかったものの、ヒンデミット事件(1934年)をきっかけにヴィルヘルム・フルトヴェングラーが同歌劇場監督を辞任した後、クラウスがその後継者となった。クラウスが残っていた記録を調査した際、この件に関して新資料が見つかったため、これに当時の新聞等の情報も加えて再検証した結果、彼とヒトラーやゲッベルスとのコネクションがどのようにして生まれたか、また、このコネクションがベルリン国立歌劇場の人事にどのような影響を及ぼしたかについて、新しい知見を得ることができた。

第二点は、1935年から1936年にかけて、クラウスがベルリンにおいて行った活動についてである。国立歌劇場でのオペラ公演のほか、ナチスの行事やラジオの音楽番組への出演、さらにレコード制作を検証した。特にラジオ放送に関しては、公文書の調査から得られた出演料に関するデータなどを示し、番組制作プロセスの一端を示した。

第三点は、クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の共演である。従来、クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の初共演は、1939年6月11日のリヒャルト・シュトラウス生誕75周年記念演奏会であると言われてきた。クラウスが書き記していた演奏記録、放送原盤記録などを調査した結果、この前年に共演が行われていたことが明らかになった。共演に至る経緯や中継放送に関しても、新資料をもとに検証した。

論文「ドイツのラジオ放送における音楽番組への第二次世界大戦勃発の影響」

本論文は、ナチス・ドイツのクラシック音楽番組について、第二次大戦開戦の前後、約1か月間を考察の対象とするものである。ここでは、クレメンス・クラウスが直接的・間接的に関与した事例が含まれている。

この時期、ドイツの各地方局は帝国放送指導部の管理下で番組制作を行っていた。例えば、ニュルンベルクで開催が予定されていたナチスの党大会では、前夜祭にワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》が上演されることが計画されており、この中継放送を巡っても周到な準備が行われていた(この公演の指揮者として最初はクラウスの名が挙げられていた)。この番組は、全国放送ネットのチャンネルでオンエアされるだけでなく、各地方局のチャンネルでも同時に放送されることが目されていた。この実現のためにとられた方策は、各局に自発的に同時中継の名乗りをあげさせることだった。この番組の中継のために段取りが調整される中、開戦を視野に入れた準備として、この公演の中継放送がある場合と、実施されない場合の両方に備えた行動が求められるようになる。最終的に政府から正式にこの上演の中止が決定されることで、この放送は実現を見ずに終わった。

これと同時に、開戦に際しての準備も進められていった。ショパンの音楽を放送禁止が通達され、ザルツブルク音楽祭の録音放送も、どのような事態にも対処できるように準備された。開戦前日には、当日朝の最初の番組を担当することになった帝国放送ライプツィヒ局から、マーチと軍歌の番組について、具体的な曲の提示が行われた。この日の夜には、各地の放送局から寄せられた担当番組の概要が作成され、全局に配信された。このプランは、開戦が無いことを前提で作成されていた番組とは大幅に内容が変わっていた。情報番組を含む多様なコンテンツが一扫され、ニュースと音楽番組だけになったのである。9月上旬はこのような番組が続くことになる。

9月上旬にオンエアされたクラシック音楽に関していうと、著名な演奏家の出演がほとんど認められない。当初の予定では、ザルツブルク音楽祭の放送など、録音を活用した番組も予定されていたが、放送局のオーケストラによる番組が中心となった。そのような中、ベルリン・フィルの番組が、ゲッベルスの指示により放送されることになる。9月11日から10月3日まで、ドイツのトップクラスの指揮者を迎え、週3回、全国に放送が行われたのである。このシリーズについては、これまで全容が十分に把握されているとはいえない状況であったため、本論文においては公文書や新聞等を参照し、出演した指揮者や演奏された曲目について、可能な限りリストアップを試みた。

このシリーズの最終回を指揮したのがクレメンス・クラウスだった。彼が出演した番組については、指揮者を招聘するまでの経緯を示す文書に加え、放送アナウンスを含む番組の音源も残されていた。これらの資料に加え、当日の批評記事も参照し、番組制作のプロセスだけでなく、戦争の雰囲気づくりのために音楽がどのような役割を果たしていたかについても、考察を行った。

(2) 1930年代後半におけるクラウスとシュトゥットガルト放送との番組制作

本件については、論文「シュトゥットガルトにおけるクレメンス・クラウス 帝国放送シュトゥットガルト局との活動をめぐって」で成果を公表した。

本論文では、1930年代に帝国放送シュトゥットガルト局がドイツ国内の番組の制作においてドイツ国内の主導的立場にあったこと、その責任者がフリッツ・ガンズであったことを示した後、クラウスの出演した番組について考察を行った。

クラウスが最初に出演したシュトゥットガルトのオペラ番組は、1937年3月に放送されたモーツァルトの《皇帝ティートの慈悲》だった。クラウスとガンズの間で交わされていた文書が残されているため、これをもとに放送が実現するまでにプロセスを提示した。さらに、この放送のために助力した、モーツァルトの舞台作品の翻訳で知られたヴィリ・メクパッハにも着目しつつ、実際の音源をもとに、番組の内容についても検証を行った。特に、音源による考察では、放送用のヴァージョンがオリジナルのどこをカットすることで成立したか、に注目することにより、メクパッハのコンセプトがどのようなものであったかを知ることができた。この観点を持ち込んだことにより、歴史に埋もれていた《ティート》が再評価されるにあたり、クラウスの番組がどのような意義を持ちえたかについても、論者の見解を示した。

1938年1月のプッチーニの《外套》と《修道女アンジェリカ》の放送に関しては、番組成立までの過程を検証した後、実際の音源を基に、番組の内容を考察した。クラウスがテキストに施した、実践面を重んじた変更箇所、番組の演出等に目を向けた。

本論文においては、1938年に制作される予定だったクラウスの指揮によるヴェルディの《レ

クイエム》に関しても考察した。この作品の演奏に関わる交渉の過程、クラウスのキャンセルと代役の決定について、未刊行の文書をもとに状況把握に努めた。シュトゥットガルト局がこの録音を重んじた背景には、キリスト教の行事にあわせて宗教曲を放送する慣習が関係していた。しかし、状況を俯瞰的にとらえれば、そうした慣習にとどまらず、放送コンテンツのストックを増やそうとする帝国放送協会の動向とも関連している可能性も指摘できるのである。

(3) 1940 年後半以降のクラウスとウィーン・フィルの演奏活動とラジオ放送

クラウスとウィーン・フィルによるラジオ放送のための活動に関して、本研究の研究期間で成果を公表できたのは、1942 年から 1944 年 10 月末までの分である。その論文は、「1942/43 年のシーズンにおけるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のラジオ放送番組」、「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 1943/44 年のシーズンにおけるクレメンス・クラウスとカール・ベームの指揮によるラジオ放送番組に関する研究」、「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の 3 本である。クラウスのみならず、他の指揮者(リヒャルト・シュトラウス、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、カール・ベームなど)の動向や、その時々的情勢等を把握しながら詳細に検証を行ったため、この 3 本の論文での執筆文字数は注を含めて合計約 12 万字となった。

当団におけるクラウスのラジオ放送のための活動として重要なのは、「フィルハーモニッシェ・アカデミー」である。この催しは放送との関連が強いものだが、資料が散逸しているため、全体像を把握することが困難だった。そのため、各アーカイブに残されている文書や放送局所蔵の音源、新聞に掲載されている放送日に関する記録や演奏批評(放送批評を含む)などを手掛かりに、制作サイドでの動向や番組の受容がいかなるものであったかについて、当時の状況の再構築を試みた。

この作業の過程で、現在インターネットで公開されているウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏情報、特にラジオ放送に関する公開データに問題点があることがわかってきた。この問題はドイツの放送アーカイブにおけるデータ管理にも大きな影響を及ぼしているため、刊行された論文においては、この点についても指摘を行った。

クラウスが出演した「フィルハーモニッシェ・アカデミー」以外の番組、彼以外の指揮者の番組についても、基本的には上記の方針で個別に検討した。

以上の作業を積み重ねた結果、ドイツの戦況悪化にともない、番組編成の方針が実際のコンサートを再現するというスタイルから、録音素材を巧みに組み合わせて多彩な番組を聴取者に提供することへと変化していったことが明らかにできた。クラウスは、放送に協力的であったため、このコンテンツ作りに大きく貢献していたと言える。

(4) その他

以上の論文に加え、ナチス・ドイツ時代のパイロイト音楽祭の放送に関して、実証的なアプローチを試みた論考を刊行した(論文「パイロイト音楽祭とナチス・ドイツ興亡 ラジオ放送をめぐる実証的検証」、『オペラ/音楽劇研究の現在 創造と伝播のダイナミズム』所収)。この時代にクラウスはパイロイト音楽祭に出演していないのだが、先に述べた手法による調査の過程で、この音楽祭の放送に関する情報を多数見つけ出すことができたためである。この論文では、放送現場で対処が求められた様々な問題(ナチスの理念と番組の関わり、費用対効果、国際的アピール、ドイツ国内での番組制作のコンセプトの変化など)について、多数の公文書をもとに検証を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤 英	4. 巻 105
2. 論文標題 1930年代ベルリンにおけるクレメンス・クラウスの音楽活動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐藤 英	4. 巻 106
2. 論文標題 ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 23-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐藤 英	4. 巻 100
2. 論文標題 ドイツのラジオ放送における音楽番組への第二次世界大戦勃発の影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 95-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐藤 英	4. 巻 98
2. 論文標題 シュトゥットガルトにおけるクレメンス・クラウス 帝国放送シュトゥットガルト局との活動をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 25-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 英	4. 巻 95
2. 論文標題 1942 / 43年のシーズンにおけるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のラジオ放送番組	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 1 ~ 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 英	4. 巻 96
2. 論文標題 総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 1943 / 44年のシーズンにおけるクレメンス・クラウスとカール・ベームの指揮によるラジオ放送番組に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 483 ~ 519
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐藤 英
2. 発表標題 ベートーヴェン《フィデリオ》 作品の受容をめぐって (シンポジウム「カタリーナ・ワーグナー演出《フィデリオ》をより楽しむために」の一部)
3. 学会等名 早稲田大学プロジェクト研究所「オペラ/音楽劇研究所」2018年度5月研究例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤英、大西由紀、岡本佳子ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 379
3. 書名 オペラ / 音楽劇研究の現在 創造と伝播のダイナミズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------